脚本家の彼女

午後 之風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
脚本家の彼女

【Ｎコード】
Ｎ１５１６Ｗ

【作者名】
午後　之風

【あらすじ】
脚本家の彼女がぼくの部屋に転がり込んで来た
ピザとビールと彼女と僕と
少し奇妙な日常生活を

そのいち

脚本家の彼女が僕の家に転がり込んで来た
7月の暑い夜に僕らはピザを食べた
初対面の僕らだったが
彼女のピザを食べる姿が好ましくて、それから僕らは一緒に暮らしている。
脚本家という職業について僕は良く解らないから
彼女にあれこれ質問するけれど
夜になるとパソコンに向かってしまって彼女は口をきかない
僕はといえばピザを食べてビールを飲んで
丸まった彼女の背中を眺めている

僕は仕事を辞めた
朝になると僕を求めてくる彼女が可愛くて
仕事よりも彼女を選んだ。

僕の生まれた海辺の街には
駅前にピザ屋なんてなくて
もちろん女の子とピザ屋で偶然に向かい合わせる可能性なんてゼロで
だから彼女がピザとビールを持って僕の向かいにやって来た時に僕
は少し舞い上がってしまって
おまけに彼女があまりにも美味しそうにピザを食べるものだから
僕はかなりの長い時間彼女の口元を眺めていた。
「君は随分と美味しそうにピザを食べるんだね、そして随分と上手
にピザを食べるけれどピザ以外に何か口にすることはあるの？」す
ると彼女はビールをグイッと一口飲んで

「ブドウ」と答えて笑った
僕は安心して
思わす彼女にキスをした。

初めて一緒にピザを食べた次の日の朝に
彼女が僕の部屋にやって来た
水色のワンピースと白いサンダルで「おはよう」と一言言うと部屋
に上がり込んだ
僕の食事用のテーブルにパソコンを置いて「よし」と満足そうにう
なずくと何やら書き始めた
椅子もテーブルもあつらえたみたいに彼女にピッタリで
まるで昔からそこが彼女の仕事場だったみたいに
まるで昔から彼女がそこに居たみたいに
欠けていた部分にピッタリの欠片が収まったみたいで嬉しくて
彼女が脚本家という事はピザ屋で聞いていたけど
パソコンで書くんだっていう事に少しビックリして
原稿用紙にでも書くのかと思っていたからビックリして
蝉の鳴き声と彼女のキーを叩く音は
ちょっとしたアンサンブルみたいだなんて考えてたら
眠くなった
とても眠くなった

「ニューヨークの黄色いタクシー乗ってみたい？」
彼女の口から発せられる突然の変な質問にはかなり慣れたけど
今日のもかなり唐突で
でもきっと彼女にしてみれば頭の中で五つぐらい考えて六つ目を口
に出しただけで
驚かれるのは見当違いなんだろうと思う
だからなのか
彼女のちょっとした言葉や行動に僕が反射的に怒りを表すと

彼女はとても戸惑う
彼女の場合は頭の中で怒りをユックリと噛み砕くので
そしてその後に口に出すので
もはやそれは終わりかけの小さな怒りであってむしろ可愛くもあって
脚本家という職業がそうさせるのか
とても理想的な怒りの表し方だと感心してしまう

「僕はカチンときたって宣言してから怒ったらどう？」
彼女からの突然の提案に
僕は頭の中で五つ程考えてから
六つ目を口に出した
「ねぇいいかい　世の中にそんなこと出来るのは村上春樹ぐらいしかいないよ」
彼女がピザを口に運ぶのを止めた
「僕が春樹に手紙を書いてあげるから君は春樹のところで脚本を書けばいいよ」
蝉の声がうるさい蒸し暑い夕方
なぜか彼女だけは涼しげで
おまけに満足そうで
なぜだか今日の彼女は
いつもより白い服がよく似合っていて
「素敵」と繰り返しながら
ピザを食べてビールを飲んで
そんなにビールを飲んで脚本なんて書けるかなと
僕が心配になるぐらい彼女はビールを飲んだ。

日に日に増して行く暑さのせいで僕はほんの少しだけ無口になった
「クーラーでも買う？」
「いらない」

確かに暑くてたまらないけれど
彼女にはクーラーの風はなんだか似合わなくて
開け放した窓の網戸の隙間から入って来る風がピッタリで
こんな暑さの中
よくもまあ脚本なんて書けるもんだと呆れながら
彼女に触れたくて触れたくてたまらなくなった。

そのに（前書き）

「今度生まれる時は鳥か犬がいいわ」
めずらしく弱気になった彼女に翻弄されながらの
夏の終わりの一日

そのに

「今度生まれる時は鳥か犬がいいわ」
夜風が涼しい８月の終わり
夏の終わりは嫌いだなんて考えていたら彼女が話しかけてきた
「それはまたどうして？」
パソコンに向かったままの彼女は
わざと髪の毛をグシャグシャにして
そのうえ祈る様な仕草で僕に言った
「考え過ぎるとどんどん変になるの悪い癖なの」

思えば彼女がぼくの部屋で
脚本を書くようになってから一ヶ月になる
いつも楽しそうに
時には歌って踊るように彼女は脚本を仕上げていった

でも今夜の彼女は落ち着きがなくて
いつもはビートルズを聞くのに
ローリングストンズやジミヘンドリックスやジャニスジョプリンで
このままだとピザとビールじゃなくて
日本酒を飲みながら焼き鳥でも食べ始めるんじゃないかってぐらい
の勢いで
何か出来る事はないかなって
僕までオロオロしてしまって
これじゃまるで本当に彼女の望み通りの
雨にうたれた小鳥の君と
飼い主に見捨てられた子犬な僕だなんて考えていたら
突然彼女が立ち上がった

着ている服を全部脱いで
グシャグシャにした髪の毛をマフラーみたいにした彼女は
僕に抱きついてきて
「ワン」と鳴いた
僕は可笑しくてたまらなかったけれど
彼女はいたって真面目だったので
「ワン」と答えた

犬になった僕らは次に何をすべきかって考える間もなく
いつもは朝に抱き合う僕らだけど
夜に抱き合うのはやっぱり素敵で
一度目が終わって一緒にピザを食べて
ピザとビールでじゃれ合った後の二度目の彼女は鳥みたいに自由で
三度目が終わってしまうと
彼女は眠ってしまった

彼女の寝顔を見ていたら
なんだか僕まで鳥になったみたいで
コオロギとか色んな虫が鳴いていて
彼女の寝息もコロロコロロと鳴いていて
世界は僕らで回ってるんだなんて
夢みたいな事も信じてみたい夜で

近頃は夜風がやたらに涼しくて
夏が終わるって事に
ビクビク怯えながら
悪い予感の欠片なんて何も無いんだって
強がってみた

彼女の肩を抱きながら

強がってみた

そのさん（前書き）

スーパーマーケットに行く事を
僕らはデートと呼ぶ

オレンジを買うために
デートに出かけた僕と彼女

そのさん

「ベットの横にはオレンジを置くべきだと思うの」
夢の中で彼女の声がした

9月なのに真夏のような毎日で
今朝も良く晴れた暑い朝で
30度をこえるんじゃないだろうかって勢いで
すでに僕は汗がじんわりと滲んでいて
それなのに彼女はいつも涼しそうでサラサラ
同じ人間なのに不思議だなんて事を
朝のベッドの中考えていたところだった

「やっぱりオレンジが必要ね」
今度は夢ではなく彼女がささやいた

2人でスーパーマーケットに行くことを僕らはデートと呼ぶ

彼女はスーパーマーケットが大好きで
それこそ上京したての大学生のように目を輝かせる
真っ赤なトマト
新発売の炭酸飲料
大好きなブドウ
歯磨き粉にシャンプー
ビールに冷凍ピザ
ひとつひとつ吟味しては
結局彼女は毎回同じ物を選ぶ

僕らは素早く身支度を整えると外に出た

彼女の水玉のワンピースは
デートの時のお気に入りで
少し大きめの帽子で日差しを遮った彼女は夏休みの少女のようだった

オレンジを買うために
彼女が選んだのは
隣町のスーパーマーケットで
バスで2区間先の
生活用品の他に衣料品や簡単な電化製品まで売っている
少し大きなスーパーマーケットだった

夏も終わりだというのに
扇風機が売り切れで
流し素麺セットとカキ氷機は安売りで
デシタルテレビでは知らない外国の歌手が歌を歌っていた

気づくと隣で彼女が歌を歌い始めた
小鳥が鳴くような声で
テンポ良く外国人歌手に合わせてハミングした彼女は
そのうちスキップでもしそうな勢いで楽しそうで
僕も嬉しくなって
「オレンジ　オレンジ」とデタラメな歌詞で合わせてみた
彼女も笑って「オレンジ　オレンジ」と歌った

彼女と一緒に歌を歌いながら
そういえばオレンジを買う理由を聞いてないって事に
今さら気がついた
少しだけ気になったけど
なんだか聞かない事が正しいような気がした
彼女の歌声が心地良くて

一緒に歌うことが気持ちよくて
それだけで幸せだって自信があった

僕らはそれこそ毎日抱き合うのだけど
日を重ねるごとに喜びが大きくなっていって
もしかしたら病気なんじゃないかって疑うぐらいの喜びの深さで
出会った頃は朝にしか抱き合わなかったけど
最近は夜に抱き合う事も多くなった

スーパーマーケットから帰った僕らは
それぞれにシャワーを浴びて
ピザを食べてビールを飲んだ
すっかり夜になってしまって
昼の暑さが嘘みたいに
涼しい風が気持ち良くって

もう少しビールを飲みたくて
冷蔵庫を開けようと立ち上がると彼女も立ち上がった

いつもよりも真剣な表情の彼女は
ベッドの横にオレンジを置いて服を脱いだ

脚本家の彼女は
操り人形のように僕を導いて
僕も彼女が喜ぶ事に没頭して
いつもは涼しげでサラサラの彼女が
今夜は身体中から汗をにじませた

二度目が終わると彼女は寝てしまった

最近はいつもそんな感じで
二度目か三度目の終わりで彼女は寝てしまう
そして退屈になった僕は一人とり残される

さて今日もビールでもと起き上がろうとすると
寝てしまったはずの彼女に腕をつかまれた
「オレンジ食べながら側にいてくれる？お願いだから」
そう言って彼女は目を閉じた

扇風機の風が少し冷たくて
彼女が寝てなんかいなかったんだ事に気がついて
あまりの喜びに動けないんだって事に気がついて
女ってのは終わった後が大事なんだって言ってたなって思い出して
僕はオレンジの理由がやっとわかって
なんだか愛おしくなって
彼女をそっと毛布でくるんだ

そして僕はゆっくりとオレンジの皮をむいて
ゆっくりと口に入れた
彼女に十分な余韻を与えれるように
彼女が本当に眠ってしまうように
ゆっくりとオレンジを食べた

にっこりと彼女が笑ったような気がした

そのよん（前書き）

彼女の夫という人がやって来た
日曜日の朝に水羊羹を手土産にやって来た
僕はヤカンでお湯を沸かして彼にお茶を入れた

僕と彼女の前にやってきた彼
ちょっぴりだけ曇りはじめた僕と彼女の日常

そのよん

彼女の夫という人がやって来た

よく晴れた日曜日の朝で
僕と彼女は何をするでもなく
朝の空気を楽しんでいた
仕事を辞めた僕には曜日感覚というものが無く
でも日曜日の朝だけはなんだか特別で
空気のにおいが優しくて
特別仕立ての光が窓に降り注ぐようで
時間がユックリと過ぎるようで

そんな朝に彼がやって来た

彼女の夫という人は
サラリーマン風で感じが良くて
少しだけ丸顔で滑舌が良くて
手土産に水羊羹を持ってやって来た

僕はいつもの様にヤカンでお湯を湧かして彼にお茶を入れた

麦茶を冷蔵庫で冷やしたりだとか
ミネラルウォーターを買い込んだりとかの習慣が僕にはない
牛乳とビールが冷えているだけの冷蔵庫で
水羊羹に合う物もなさそうで
結局暑いお茶を入れる事にした

お湯が沸くまでの沈黙を破るように彼が言った

「修学旅行でこの辺り通りましたよ」
「修学旅行ですか？」
僕は聞き返した
「私の学校は田舎のほうなので」
彼女の夫という人ははずかしそうに小さなタオルで汗を拭いた

水羊羹を食べながらお茶を飲んで
汗を拭いてから彼は立ちあがった
玄関の横に置いた紙袋を持ち上げると
中から何やら洋服の様な物を取り出した
「パジャマ持って来たよ」
彼女に向かってニッコリ笑って
ハンカチで汗を拭いてから
もう一度笑った
「これ着ないと眠れなかっただろ？」
彼女は頷いて受け取ると
パジャマを大事そうに胸に抱いた

彼は満足そうに笑って汗を拭いた
そして何か思い出したように慌て紙に書き始めた
「私の連絡先です
何か入り用な時は連絡下さい」
そう言って僕にメモを渡すと
すまなそうに何度も頭を下げた

彼が帰ってしまってから
僕はもう一度ヤカンでお湯を沸かした
残った水羊羹を食べて
お茶を飲みながら彼について考えた
そして彼の持って来たパジャマについて考えた

水羊羹が美味しくて
彼女にもすすめたけど
彼女はパジャマを抱いたまま
結局その日は一言も口を開かなかった

鈴虫とかコオロギとかが
リンリンとうるさくて
僕はパジャマがやって来る前の彼女が恋しくて
彼の存在が夜になってから
大きくて大きくて大きくて
寒くもないのに布団にくるまって
彼女の居所がわからなくなってしまって
寒くもないのに布団にくるまった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1516w/

脚本家の彼女

2011年10月9日14時47分発行